

早物語伝承の様態 — 山形県庄内地方を中心に —

① はじめに

民間説話の一つ「早物語」の様態を明らかにすることにより、伝承とは何かという命題解明に近づくことを目的に、本考をまとめてみた。民話伝承を考えるさい、二つの資料形態が存在する。

その一つが自分以外の調査者・採訪者・研究者により編まれた他者資料である。資料集を作る場合には、「編集」せざるをえないという現状がでてくる。ガリ版刷りの資料は、聞き書きしたものをすべて網羅することも可能であるが、一般に活字をもって印刷するさいには制約がでてくる。それは出版費用とのかねあいや、商業出版の場合には編集方針とのかねあいででき、結果として編者の意図により、掲載、非掲載資料を選択することになる。第二の自己資料はいざしらず、編集されたものから聞き書きの百パーセントの中身を知ることが不可能ということになる。

そして「編む」ということは、調査をするさいからそうであるように、編者（調査者）の伝承に対する興味・関心が反映された結果でもある。つまり、他者の意図をもった資料であることを認識しておく必

要がある。そのことをふまえた上で、検討のまな板にのせるといふことになる。

第二には、自分で聞き書きをした資料で自己資料とも呼ぶべきものである。こちらの方は、自分で聞き書きした資料であるので、内実もすべてつかみきることのできる資料といえる。

このようにして出来上がった資料集は、伝承者による伝承資料と、伝播者による伝承の混在化した結果としての産物である。そこで民話研究の上では、伝承者・伝播者とは何かということが大きな問題となってくる。しかし、私達が調査というよりも採訪の上で、このことが具体的にどのくらい把握できているか疑問である。

ここで調査ではなく採訪とことわったのは、いくつかの集団調査体制をくんできた一人として、あえて私達というならば、私達のしてきたことは、調査ではなく採集訪問旅行ではなかったかという、素朴な問いである。とかく民話の一つである昔話を聞く時、調査という形になると機械的な聞き方にならないよう、話を聞きだすまでの雰囲気づくりとして、孫の話、ゲートボールの話、老人クラブの旅行の話というように、直接昔話そのものから関係のないようなことから入り話の

矢口裕康

られて、空白の解消へとたどりつくのではないか。また、その中で今までよい語り手といわれていた、いわゆる昔話をよく伝承している人の方に、注目し、俗にいう語り手になれぬ人の存在は無視されていたのでは空白の解消につながらぬ。となると昔話を聞きに行くという行為の中で、本当に伝承保有を描きだせていたか甚だ心許ないと同時に、伝承という観点から考えれば、昔話のみ自立して伝承されてきたのではないことはいうまでもないことである。とすると、民間説話総体の中の昔話ということが見落とされていたとすると、民俗総体の中での昔話などという観点には、到底たどりつけるはずもない。昔話を聞きにゆき、たまたま聞きだせたものを集め、資料集としたという結果になりかねない。

それゆえ、昔話を聞くということは、調査者個々人の聞き出し方の巧拙にもゆきつく。あの人が聞いたらこうだったとか、この人が聞いたらこうだったという結果もでてくる。そして、聞く者の興味ということも、聞くという行為には大いに関係するということになると、これでは、絶対資料としての昔話とはなりえぬきらいがある。また、調査のさいテープレコーダーを用い録音したとなると、テープ抜きということも問題となってくる。よく資料集の凡例に「収載資料の記録は、原則としてテープに収めた話者の語り口を、そのまま筆録した」というような記述がみられる。この話者の話を、忠実にテープ抜きをしたということに、資料を作る者としては、ほりりさえもっている。しかし、ここにも落とし穴があったのではないかと思えてくる。

私自身の資料を基に、その一例をあげてみると、耳の錯覚ということも含めて、謙虚さの足りぬ資料としてできあがってしまった。

〔事例〕

そうれものがたり語り候

姉ちゃんの股に万町歩のでんずがござる

交通整理せねばならないというのに

いやさせられないというのに

整理杭ぼつりとさされたんのがたり

×―の部分であるが、たしかに「こうつうせいり」、この漢字をあてても意味が通りおかしくないが、庄司翁（語り手）に尋ねかえしてみると、「交通」ではなく「耕地」とのこと、これでは、かなり意味あいがかわってしまう。このようなことは、一人私のみでなく、他の資料集にもありうる、おこりうることにように思える。

とみてくると、どうも自己の採訪に対しても「資料」としての一抹の不安を覚えるしだいである。では、語り手の実像を描き出せる民話研究とは、どのような形であろうかということになる。民話を聞きに行くということは、とにかく語りの現場にたってみることに他ならない。その実感を、どのように描きだせば、語りを実像化できるのかということである。

そのことの一例を、山形県飽海郡遊佐町の調査事例を基に具体化してみた。

② 早物語伝承の様態

昭和五十八年十二月二十六日、久しぶりの山形県庄内への訪れの中で、はじめての語り手との出会いであった。

この語り手とは、明治三十二年八月四日生れ、遊佐町吹浦横町生まれ、横町育ちの赤塚幸である。このお婆さんから、以前の採訪により得たものを参考に、早物語と語り手を考えてみようと思つての聞き書きである。

会って、お婆さん以外によく早物語をおしえてくれた高橋徳代他の

語り手について聞くと、

「八十越えねば死ねないのは困る」

「長生きぞんだ」

と切りだし、新築して間もない仏壇のある部屋で

「最近は何よりがいらぬ」

とつき、つづけて

「爺さんと婆さんと一緒に、もう一緒に死んだ。おけやの婆さん死んだ、だだの家の婆さん死んだ、たいの婆さん死んだ。この一年べろっといつた。俺一人がていねえ」

とつづげさまに、最近の年寄り仲間の死を告げ

「もっけだあ、あんまり残て」

とぼつんと語った言葉のひびきが耳に残っている。人間年をとり、死を迎えるということは自然の成行であるが、十余年振りの山形採訪の結果が、眼の前につきだされたようで驚いた。

そして、ぼつぼつと、早物語他を十二ほど語ってくれたのである。

今回の聞き書きで得たモノガタリを、以前の『早物語聞書』における庄司弥右衛門（飽海郡平田町山楯）のモノガタリ五十二と、瀬尾治の報告、西田川郡温海町槇の代・板垣蔵恵の十九のモノガタリを比較し早物語とはどのような伝承存在であるかを考えてみたい。

赤塚幸の語ってくれた早物語他を、採訪ノート風につづってみて、伝承について考えてみたい。

〔資料①〕

それものがたり語り候

裏の山椒の木にふくばい（瓢箪のこと）が三つ下がっておりますと
いち番のふくばいの願ひことは身上（自分のこと）とこしょうとた
つぷりいれてもらいたいのものがたり



(赤塚 幸)

にん番のふくばいの願ひことはあんころ餅をじょう箱ぼこの中にいっ
ぱいいれてもらいたいのものがたり

さん番のふくばいの願ひことは身上もこしょうもいらぬ若い十
六、七のへその下をさらっとなでさせてもらいたいのものがたり
開口一番に語ってくれた早物語が、ふくばいの物語りである。これ
を聞いたさいも「願ひこと」の部分で、最初聞いた時は「にがいこ
と」と聞こえ、再度の聞き書きによって、にがいことが願ひことであ
ることがわかった。内容からしても、にがいことでは意がつうじない

のだが、私が前述したのは、このような聞き違いを含めてである。また、早物語は昔話と同様、その時の場面や聞き手によって、語りが創られる面を強くもった文芸のように感ずる。そのことは、この物語りでも「十六、七のへその下をさらにさらっとなでさせてもらいたいものがたり」のくだり「なでらせてもらいたいものがたり」へと、再度の聞き書きの中では変化がみられたところなどである。

【資料②】

それものがたり語り候

この親がた福もちで玉子のようなる伴もち花のようなる嫁もら
って

親子名のりの盃よ金の盃いただいて

黄金とがねの銚子で泉酒

扇あふぎのようなる末広く団扇あふぎのようなる末丸く

こんなめずばしごかないわ末は長者になつたりのもものがたり

この物語りでも、「盃」の部分が「酒盛り」へと再度の聞き書きの
さい変化していた。これは結婚式で語るもので、赤塚媼は今でも頼ま
れてやることがあるそうである。現在に生きる早物語の一つといえる。
宴席では、物語りか唄・大黒舞のどれかができる必要があり、赤塚媼
は唄が歌えないので物語りを鍛えたという。

【資料③】

大黒さんも福の神 恵比寿さんも福の神

夜にうってても千貫目

夜中にうってても千貫目

夜明けにうってても千貫目

さんべん神の宝を奥のおん蔵に納めおき

酒は泉のじょう酒さけで 弁財天の酌とりで

飲んだり食ったり富貴ちかひ万福長者ばんぷくちやうになつたものがたり

これも祝福系の早物語であろう。赤塚媼は、大体物語りを語るさい
手で拍子をとりながら語る。菅江真澄『はしわのわかば』の中に、
「をへぬれば小言人コカシヤ出て手をはたとうちて、それ、ものがたり語りさ
うらふ」という様態につうじるのであるうかと、ふと思つたしだいで
ある。赤塚媼は座頭さんを見たことも聞いたこともないというから、
座頭の語りの様態から伝受したということはありえないのであるが、
語りの伝承とともに様態の伝承ということも一考したいところである。



(庄司弥右衛門)

しかし、私に五十二の早物語を語ってくれた庄司弥右衛門の語りは、
私という調査をする者相手の語りであるからか、とも思うが、居住居
を正して「元来、物語りは少人数の席で物静かに語るのが好ましく、
味わいも深いと思われませんが、私の場合耳が遠く、地声が高く、大勢
を対象にすることが多いので、勢い声高な調子で語るようになりまし
た。最後の止め場は、声を落としますが、含み気合と言いますか、却
って、それを強め余韻を残すように工夫しました」(『早物語聞き書』P 78
79) というような語り方である。

また庄司翁においては、ある物語りを基にした創作、例えば祝言のさい

それものがたり語り候

花嫁のでんずを調べてみれば

なずき（額のこと）七町歩、鼻八町歩、口九町歩を貰い

ずっとさがりましてへそそろばん（胸の中のこと）をおいたところ

が

毛黒一本ひとまたぎ、万町歩ただ貰ったんのがたり

という花嫁の物語りが、花髻の物語りとして

それものがたり語り候

花髻さんのでんず、眼は万がり、鼻は八千がり、口は九万がり、

なずきは何万がりあるか数えきれないんのがたり

とし、その花嫁、花髻の物語りのあと

双方共にたいしたでんず持つ、この家はばん万才、まずはめでた

しめでたし

という形で創作している。庄司翁の場合、五十二の物語り（表①参照）であることをみると、早物語と創作性、即興性という側面を感じる。

髻の物語りもないわけではなく、髻取りの物語りとして、次のよう

なものを語ってくれた。

それものがたり語り候

祝い重なるこの家の座敷

恵比寿様の仲人で大黒様の髻もらった

もろうた大黒さんは福の神

七福神の酒盛りで鶴と亀との舞い遊び

恵比寿さんと大黒さんが釣り竿かついで

出て踊るんのがたり

という語りが伝承されているのである。庄司翁の創作の傾向は、伝承されたものからの発展、例えば、四十から五十歳位の山楯のゴンシロウのダダチャから「女の品物の物語り」を聞くと、それを「男の品物の物語り」という形にしたり、山楯のスケデンの婆ちゃから「毛の生えたづくしの物語り」を聞くと、その自作をつくったりするものが一つの形。二つ目として嫁取りの物語りなどの詞章の影響を受ける形のもの

それものがたり語り候

正月二日の初夢に一富士二鷹三茄子び

七福神のお酒盛り、鶴と亀との舞い遊び

恵比寿さんと大黒さんが釣り竿かついで踊り出したん物語り

「一富士二鷹三茄子」という初夢としてよいものとする諺を前半におき、後半は髻取りの物語りの部分を導入するというような形である。

また、三番目には、庄司翁の物語りの形態としてはづくし形のものも多く、まっちょ（まんじょ）尽し・だっぺ尽し・毛尽し・花尽し・きのこ尽し・木尽しと六通り八の物語りがある。その形態をふまえ、次のような「蛇づくしの物語り」も創作する。

それものがたり語り候

蛇づくしの物語り

どこじゃの池には数年大蛇が住むそうじゃが、その蛇が、めすじやか、おすじやなんじやか、かんじやかわからんじや。

という形である。このように庄司翁において三とおりの創作法というものが見られるが、このような三形態も含めて、創作意欲をそそるような語り及早物語りである。

庄司翁に話が転じたので、翁の早物語と他の伝承との関連をみると、「蛇づくしの物語り」に対する説明として「早物語でなかったものを

物語り化したもの」もいくつかみいだせる。門付の鮎売りにこのようなものがあったとして、みかんの口説の物語り化したものや、門付の口説節・長い唄・端唄の物語り化したものと、翁が指摘するものとして五つある。

また早物語の伝承の上で、特に注意を要する昔話と考えられる「長い名の子」(形式・大成番号⁶³⁸)「拾い物分配」(動物分配・大成番号⁹)の、同一伝承者の中での伝承保有ということにも注目したい。前者は、落語「寿限無」としても名高いものである。『増補落語事典』(東大落語会編)によると、解説に「前座の口ならしに好適なはなし。上方では『長名の伴』ともいう。諸地方の民話にこの原型がある」とあるように、座頭の語り物芸における口ならし・前座的な意味あいをもつ早物語の様態にも通じる昔話である。子の長命を願う長名をつけるのであるが、子の長い名前の部分を、庄司翁は「しってげ、てげてげ、てげしりごんばのそしれんぼう、茶碗にちやうすちやこーるーりーみょうこにみょうこ、おうこにおうこー、やけ山弥次郎、ひきにのこう助」としている。この部分は、一気呵成に語るのを常としている。そのような語り様と早物語の関連ということで注目されるのである。この「長い名の子」については、全国的にも資料を見出すことができ、その子の名前の部分もさまざまな変化をみせているが、その語り様の共通性から考えると、「長い名の子」が、早物語伝承の全国的な残存形態と推定できるのではないだろうか。

もう一つの「拾い物分配」については、飽海郡平田町山元字坂本の長堀ともえが、

それれものがたり語り候

裏の畑に鳩は豆食て鶏米食て仲良く遊んだおーりに、そこで鳩金百拾て、鳩が拾ったと、鶏が拾ったと喧嘩っこが始まったと

そこさアリがちよこらちよと出はってきて、あとの九十をさいぎをつくし

鳩は八文鶏二文、あと九十はアリッコもうけたものがたり候という聞き書きの存在がある。同一町内で、早物語を多数伝承していた庄司翁にも

昔

ある時、蟻と蜂が道連れになって旅をしました。だんだん歩いていくうちに、むこうに鯀くまの一片が落ちていた。二匹は「俺が先にみつけたから俺の物だ」と言い争ったが、結局、蜂が「昔からにしがはちだ」と言って、俺のものだと取ってしまった。また、だんだん行くと、今度は鯛が一匹落ちていたので、またまた双方、俺の物だと争ったが、とどのつまり「昔からありがたい」と言って、俺の物だと蟻に取られて、しっぺ返しをされたとき。

という昔話(「蜂と蟻の魚分配」動物分配・大成番号¹⁰)の伝承存在がある。このように、早物語は他にも他の伝承の影響をうけやすい伝承であつたらしい。しかし『昔話伝説研究』第六号「早物語の一考察」において、瀬尾治が、庄司翁の次のような物語りを指摘し、『日本昔話大成』⁴⁸²「大鳥と蝦」からの移入としているのは早計であろう。

それれものがたり語り候

夕ゆふべ見た夢、大きな夢で

飛鳥(地名)の仁王様の下駄履いで、鳥海山を横に背負しよって、天の橋立て渡る時、あんまり咽が渴いだったので、近江の琵琶湖に着いたら一口二口飲んだれば、なんだか咽にさわったよ、はくしせんしたれば、天の橋立て飛び出はたんの物語り

むしろ早物語伝承にとって、ありえないものを語るといのが、内容の大きな柱の一つであることを見忘れてはなるまい。

ということ、赤塚媼の聞き書きにもどると、赤塚は「ほらや嘘をつくことはしない」として、「おら、ほらば語れないし、嘘も駄目だな」「女子ならいない、やっぱり男だな」として、ほらや嘘の物語りは男の得意とするもの、語るものとしている。しかし、資料⑤にあるように、実際には赤塚媼も語ってくれた。次に語ってくれたのは「こら物語りならねえねの」として

〔資料④〕

こらえさしの浜で、おるぶるさん

昆布ゆたつたと、こらほつたとほしたとかねなつたと

あんまり面白で、あんまり走つたば

眼さ砂はって気もやけた(怒つたということ)

を語り、次にありえない物語りを

〔資料⑤〕

それものがたり語り候

えんもんぐろうという人は

空に頭をく(ふ)つつけて霞に咽をくつたげて(ふ)かたげて

この夏の炎天下のことなれば

咽が渴いてしようがない

西の海をくつたげて(ふ)かたげて、ガンブゴンブと飲んだれば、

千石舟が七八艘も咽にはばかったりのものがたり

㊦文字の下の()は二度目に聞いたさいのもの。

これはまさに大話ありえない物語りである。

〔資料⑥〕

それものがたり語り候

今日は日もよい天気もよいし

新じゃ(新しい舟のこと)おろして浮き眺むれば

ともに大黒、表に恵比寿

しんざんそのもの何ごとなれば

金と銀とのはりわけ荷物

錨にあげるよ風さしこみよ

三十五だんの帆幕あげて、吹浦港さじんじんとはつたりのもの

たり

〔資料⑦〕

それものがたり語り候

この座敷はおんめでたい

おんだいこんだと、根元はおつきく、表はばんとしられたるもの

のがたり

資料⑦は、座敷に始めて出入りする時に語るものだとしている。この頃、早物語をどのようなところで伝承したのかを聞くと「アキナイの際、馬鹿な真似をする」として、早物語や次のようなものを、客よせとして孫婆さんが語っていたのを聞いて伝承したという。

〔資料⑧〕

。この、秤もしらねし札もしらねし

秋田音頭で、在郷かけまわし

これ馬鹿だというども

うめもの食うとこみると なかなか

それこれだ そこどっこいしよ

。こら、たあたあたあたあたまつみつ

たもしこ来たかとみるこしたれば

たもしびながむれ、よっぴき男が来たつたあよとどっこい(小さい

い声になり翻字不可能)

後者は意味も不明であるが、どうも前者は、物を売るさいの調子の

表① 語り手による早物語分類

その他	色もの	大話	祝	福	
51 44 37▲ 52▲ 46 38▲ 47 40● 48 ④● 49 42● (14) 50 43	39● 30 21▲ 15 31 ②▲ 16 33 25 17 34▲ 27 18 ⑤▲ 28 19 (19) 36▲ 29 20	12 13 14 (3)	② 26 32 45 (16)	7 1 8 ② 9 3 10 4 11 5 23 6	庄司弥右衛門 (52)
	(4) (6) (8) (10) (11)▲	9	5	1 2 3 7	赤塚 幸 (11)
19 5▲ 6 15 16 17 (7) 18	13 4 8 9▲ 10 11 12	14 (1)	14 (4)	1 2 3 7	板垣蔵恵 (19)

注①・庄司の番号は自著『早物語聞書』による。
・赤塚は原稿中の資料番号を表す。() は早物語と認定できないのではないかと思われるものを表す。

その前に、分類ということであるが、以前『早物語聞書』での試案および安間清の分類案の検討をふまえ、次のようにしたい。
○内容面「A祝福系①屋敷②座敷③酒蔵④嫁・賀、B大話系（おかしなありえないもの）、C色もの系（下がかったもの）、Dその他」
○形態面「Aづくし形式、B数え唄形式」
この分類案をもとに表化したのが、表①である。

表② 庄内地方の早物語

地域	語り手	語り手		計
		男 (話数)	女 (話数)	
飽海郡	遊佐町		8 (26)	8 (26)
	八幡町		10 (23)	10 (23)
	平田町	4 (57)	5 (14)	9 (71)
	松山町	1 (1)	7 (13)	8 (14)
酒田市	川北	8 (15)	11 (22)	19 (37)
	川南	1 (1)	4 (13)	5 (14)
西田川郡	温海町代		3 (25)	3 (25)
計		14 (74)	48 (136)	62 (210)

・板垣については、『昔話伝説研究』第六号「早物語の一考察」からの分類。
注②○は自作、番号の右隅上・はづくし形式▲は数え唄形式を表す。
この表を基に考えてみると、赤塚は祝福系が多く、色のはいったものや嘘やほらがいってものは、女は駄目であるという本人の指摘にそったものとなっている。
しかし、これを女の早物語の特徴とはどうもいえそうもない。というのは、板垣の早物語十九のうち色もの系七という事例である。瀬尾の報告にしたがって分類してみた。
庄司翁については、祝福系十六・色もの系十九と、どのような内容・早物語についても自分のものにその場で語りを変化できるという即興性の側面をこの語り手はもっている。そのことの反映として、祝福系・色もの系各二つずつ五の自作の早物語の存在が注目される。赤塚の指摘にもあったように、早物語は語り手により創作される余地が多い伝承といえる。庄司翁の早物語は、づくし形式・数え唄形式の十二の存在からみても、かなり巧みな語り手であることが指摘できる。
男・女の早物語を庄内全体からみると、表②のように、調査対

象となつたどの地域でも、昔話と同様、早物語の伝承者として認定できるのは、女性の方が優位である。

最終的な集計は、男十四人(七十四)・女四十八人(百三十六)ということで、早物語の数は、二対一ぐらいの比率となっているが、男七十四のうち五十二が庄司翁の語りであることを思うと、どうも早物語の語り手としての女性の優位が歴然としてくる。

③ 安間清の早物語研究

昭和五十五年、『早物語覚え書』の著者安間清は、早物語研究において着目すべき著作を提示した。その著作とは『柳田國男の手紙―ニソの杜民俗誌―』である。二部構成として、第一部には、柳田の安間あての三十一枚の葉書と五通の封書、第二部は「ニソの杜」の調査報告となっている。

早物語研究の上で注目したいのは、第一部の書簡である。書簡三十六点の中に、早物語をとおしての、安間に対しての柳田の助言が七点ある。この書簡をみると、柳田の早物語に対する考え方、および早物語研究の展望をも導きだせるのではないかと思つている。

以下、書簡の古いものから検討していく。
八(昭和二十三年)

〔前略〕別に早物語の集録を世に出さうとして時足らず打すて有之候、もし貴君にて之を追補整理して見ようという興味があるならその素材を托してもよろしく候。ご一考被下べく候 十月二十九日

25 「その素材を托してもよろしく候」という一文にも表れているように、
というのが早物語に関する初出である。この文を読むかぎり、積極的な柳田の意思はみられない。むしろ、次の「九」を重ねあわせて読んでも、早物語研究に対して否定的である。しかし、そこには「八」中

柳田の安間に対しての姿勢を感じとることができる。「九」(昭和二十三年)においては

「二度目のお手紙拝受、学問にはやや横路なれども氣持が動くならば早物語集の試なさるべく候、それは菅江真澄の『鄙の一ふし』の末に出て居る早物語数篇を中心にその後集まったものを並べて註解して見る仕事に候『一ふし』写真版はお手元にあるや否、古典全集にも活字版は有之候、此方のノートは控え造つて後お貸し可申候、十一月九日」

柳田の姿勢は、学問というものを介在とした愛情あふれるものである。しかし、早物語研究は「学問にはやや横路なれども」ということであり、註解するということに帰結する。それが「十」(昭和二十三年)では

「早物語は『鄙の一ふし』以外には数篇ありそれを比較して見るのが民俗学の仕事に候追々にご通知可申候、中山氏校訂の『諸国風俗問状答書』はご所属にや、その中の長岡領のものにもテンポ物語というのがそれに候(後略) 十一月二十一日」

ここで、柳田は比較研究ということを示しているが、そこにでてる例示は近世の文書であり、民間説話資料としての早物語の存在が少なかつたことが窺われる。そこで、安間は自註として「第二の点については相当長い時間をかけて早物語がまだ生きて残存しているらしい東北地方に出かけて探さねばならぬだろうということであり」として、調査の必要性・可能性を示している。ここにいる東北地方とは余りにも漠然としていて、どこか判然とせぬが、とにかく昭和四十七年よりの飽海郡昔話調査会による調査によつても、早物語が山形県庄内地方には、存在していたことは事実である。しかし、その資料をえたとしても、早物語をどう位置づけるかが難問である。

「十二」(昭和二十四年)において、柳田は「(前略)早物語は高等学校のよみ物にするつもりでご計画下さい、あまりごちゃごちゃしたものでなく、四月五日」

と、比較研究という民俗学本来の素材としてではなく、古典の読みものと考え、「十三」(昭和二十四年四月二十二日)において

「早物語は是より大に進むこともおぼえず研究題目には不向かと存じ候」

という提言をし、かつ安間が文部省への申請をということを問うた返事として、「十四」(昭和二十四年)においては

「何か新たに経費を要し比較的短期に収獲のわかるやうなよい題目さへ見つければ成否はとにかくいつでも研究所は紹介の労を取申すべきもこの早物語は資料増加の目当てがつかず一方に上手にまとめたら金になる事故是に又補助を取るは穩かならずと存居候、但し今のうちならば貴君ご中止なされても又他の方法無きに非ず候、もう一度お考被下度候 四月三十日」

ということ、「資料増加の目当てがつかず」ということは、現在までの早物語資料収集の状況をみてもわかるように、うなづけるのであるが、「一方に上手にまとめたら金になる事故」という点は理解しがたい。柳田は註釈書としての高校生むけの出版ということを考えていたのかもしれないが、それが「十八」(昭和二十四年)

「(前略)早物語の内容の研究は新しきよい仕事になり可申候、是からも注意いたすべく候、沙石集もそのうち一度当って見るつもりに候 十月二十二日」

ということ、自註にもあるように「幸いにもこの希望がかなえられてわたしは、昭和二十八年と同二十九年の夏休みを利用して東北地方の調査旅行をすることができた。収穫は思ったほどではなかったが、

この二度の旅行はわたしにいろいろの意味で大いに有意義なものであった」というところへ至った。

しかし、この七点の柳田からの書簡をみても、柳田は早物語研究に對して、どうも悲觀的であったようである。その柳田の指摘どおりの現状が、安間・柳田書簡以来三十年以上経た現在での早物語研究である。しかし、現在は、今回の採訪も含めて、何百点かの資料を確認することができ、比較研究の材料は集まりつつあるといえよう。では、そのような現状もふまえて、そこから何を語れるか、もう少し述べてみたい。

④ 早物語研究の今後

瀬尾治は「早物語の伝承—庄内地方を中心に—」(『日本民俗学107』)の報告の中で「早物語における今日の状況は伝承の末期的なものと考えられるから、『薪とり』とか『農作業の時』というのは、比較的新しいところの伝承経路と思われるが、一方『正月』とか『家普請の時』という、いわゆる祝福の場というのは、古い伝承の名残を残しているものといえよう」と指摘しているが、そうであろうか。伝承は字の表すごとく受け継いでいくものである。とすれば、伝承は伝承の存在する状況の変化により、伝承の場や伝承者、伝播者にしても変化していくのが自然であろう。

つまり現在どのように機能しているかということから考えていくべきであろう。赤塚媼のように、媼が伝承経験をした場の復元が可能ならば、そこにおける早物語の機能ということを含めてである。十一の内容をみても、祝福・笑い・大話と色々な要素をもったものとして語られているのであるから、内容とは伝承された場の関連ということもでてこよう。赤塚媼の聞き書きの中で、特に注目したいのは、孫婆さ

んと大きな荷車をひいて、片道五里の道を行商して通ったさいの語りである。商売をする上での早物語のみではないが、早物語が活用できる場があったということである。

とすると、「『商売人が正月や盆に来て語った』とか『湯温海からパン売りが来て語った』という報告を、瀬尾は「『商売人』というのは吟味を要すると思われるのでここでは置いておく」と述べているが、その報告こそ、現在から早物語伝承の機能を考えるさい、注目すべきものとなってくる。また、現在八十六歳の赤塚媼に聞いても、座頭さんの存在はしらないという。八十六歳の赤塚媼の幼少の頃・明治時代の末には早物語の伝承存在としての座頭の姿をみる事ができなかったのかもしれないのである。少なくとも赤塚媼は、座頭によらず数多くの早物語を受け継いだのである。たしかに、菅江真澄の『はしわのわか葉』において「語りさふらへといへば紙張の三絃とうだし、こわつくりして、尼公物語とて、佐藤庄司が家に弁慶・義経、偽山臥となりてやどりし事を語り、をへぬれば、小盲人出て手もはたとうちて、それ、ものがり語りさふらふ。『黄金砂まじり山の蓍積、七駄片馬ずっしりどっさりと曳込だるものがたり』また『ごんが河原の猫の向面さるのむかつら』『鈍とられ物語り』『しろこのもち、くるこのもち』などかたりくれたり」と、天明八年五月十日の条に、題名を含めて四つの早物語と認定されるものの記述があるが、これを「小盲人出て手をはたとうちて」「それ、ものがたり語りさふらふ」と語り出したらしいことからみればこの天明六年前後においては、早物語と小盲人とは確実に結びつくものであった。

しかし、現在私たちが採訪をしてみても、座頭を含め祭文語りや万歳の存在があったことを、聞くことはできても即早物語の伝播者の事例として聞くことは不可能である。とすると、早物語と伝播者の関連

も、座頭・祭文語り・万歳の流れから、商売人・パン売り・行商へと変遷かつ同一並行として存在し、民間宗教者や祝儀をつかさどる者が伝播者の存在ではなくなってきたことを、確認しておくべきであろう。早物語と祝儀性ということの説明の上では、座頭他の伝播者がより有効であるということではなく、現在の伝承者達の伝承に目をむけることを忘れてはならない。

赤塚媼も、現在でも結婚式のさい「モノガタリ」を語ってほしいとの依頼があり、宴に呼ばれて語ることがあるという。早物語伝承は、このような形で、祝儀性の側面も保持してきているのである。

瀬尾は「現段階は古い形態の名残と比較的新しい形態とが入り交っている状態といえる」という結論にゆきつくのであるが、目の前に、個々の伝承として提起されたものが現在であり、そこから考えるべきであろう。今回の早物語聞き書きから、採訪と現在という命題を再確認させられたいである。

⑤ まとめ

本考のまとめとして、以上のことを概観し、かつ昭和五十九年におこなったアンケート調査をも検討材料に加え、早物語伝承の様態を考えてみたい。

アンケートの対象とした地域は、俗に山形県内で庄内と呼ばれる地方の一角に位置する飽海郡四町である。庄内とは最上川下流、日本海に臨む酒田・鶴岡市周辺の地の総称である。その一角に、秋田県境の鳥海山麓に飽海郡は位置する。

何ゆえに、この地域をアンケートの対象としたのかというと、かつて、飽海郡昔話調査会をはじめとして、早物語伝承が数多く確認されている地域であるということからである。そして、座頭が早物語を語

り歩いたであろうとする想定のもとに、飽海郡四町のすべての社寺にアンケートを送付してみた。

表③ 早物語アンケート

	神社	寺	院	計
遊佐町	3	31(5) 龍頭寺、浄勝寺、常恩寺、宗泉寺、宝泉寺		34 (5)
八幡町	1	16(3) 円通寺、慈光寺、普門院		17 (3)
平田町	2	13(4) 龍雲寺、林秀寺、冷泉寺、他1寺院		15 (4)
松山町	1	10(3) 宝蔵寺、総光寺、龍沢寺		11 (3)
計	7(0)	70(15) ※約21%の解答		77 (15) ※19.5%

④1, 計中()は解答をもらった寺社数

表③をみてわかるように、解答があったのは七十七寺中十五寺院、十九・五多であった。この結果をも分析し、まとめたい。

I 安間清の早物語研究

安間清は、早物語研究を明確にうちだした研究者の一人である。

氏の研究方向を明示するためには、『日本昔話事典』の「早物語」の項をもってするのが理解しやすい。安間は、早物語を

- 1 「聞き手を笑わせるようにきわめて早口に語る口承文芸」
- 2 「ほとんどの早物語は内容的にはきわめて滑稽諧謔さらに荒唐無稽聞く人を思わず失笑させずにはおかないような短い詞章を、しかもきわめて早口に語るものであった」

3 「語りの始めと結びの言葉が形式化していること」

4 「琵琶法師が若年の盲僧に『平家物語』を教える時、その発生訓練用にこの早口を習わせたものと考えられる」

5 「能楽に対する狂言のごとく、つまり一般に大夫に対する才蔵というように、正統なるものの脇役として聴衆を笑わせ、楽しませる副

次的な性格を早物語は強くもっていた」とおよそ五点指摘している。

1の点について、野村純一は二点指摘している。その第一は「笑わせる」ことのみが、早物語伝承の特性ではないとする指摘である。このことは、今までも述べてきたように同感とするところである。また第二に、現在の早物語伝承の聞き書きをみると、待遇表現ということもあろうが、早口とは聞きとりにくい面もある。早物語が「早口でカタル」という状態をもち、かつそのことに意味を認められるとすると、語り様も早物語伝承と現在を考える一つの素材となると思う。

次に、③でも述べたように安間清の早物語研究に示唆を与えた、柳田國男との関係を、『柳田國男の手紙―ニソの杜民俗誌―』から検討してみた。

柳田の安間あて書簡(三十一枚の葉書、五通の封書)中七点を、早物語関連のものとして指摘できるが、昭和二十四年四月二十二日「13」の「早物語は是より大に進むこともおぼえず研究題目には不向かと存じ候」の一文に象徴的に表れているように、柳田は早物語研究に対して否定的であった。その一因は採集資料が比較検討する上での絶対量として存在せぬということにあるようである。しかし、現在採集資料の収集という面では、多少なりの進展はみせていても、柳田が指摘した現状を未だ突破できぬ研究状況といえる。

II 赤塚幸の早物語から考える。

1 現在まで生き続けてきた伝承であること。

赤塚資料中②の現在でも結婚式のさい頼まれて語るとする物語りや、座敷に出入りする時「座敷ばめ」として語る⑦の物語りの存在から、このことが言える。また⑧⑩の、赤塚が子どもの頃、孫婆さんについ

29 IV 早物語アンケートから考える。

て八幡町へと行商の折語ったとする物語りにも注目する必要がある。脈々と、形をかえ伝承維持されてきたのである。以上のこともふまえ2時代・社会状況の変化に対応できる伝承であること。

3 赤塚個人の資質であるかもしれぬが、男の得意とする早物語、女の得意とする早物語があるのではないかと考えられること。

男の早物語としては「ほら、嘘は男の人のほうが得意」「色が入っているものは駄目」ということから考えると色が入っている物語りは男の得意とするものと考えられる。しかし⑤⑥の伝承も、赤塚が保有しているところから、そうとは言いきれぬ側面もある。また、女のみならず一般的にも、祝いの場では唄や舞(大黒舞)・物語りのいづれかが出来ることが要求された。その中で、赤塚は舞や唄はだめなので物語りをというところもある。

4 3との関連で、「語り様」からみてみると、赤塚・庄司の二人の語り手では、男語り・女語りとも称せるような違いが見出せる。

5 早物語伝承とは、即興性・創作性という面をかねそなえた伝承である。

6 また、他の口承文芸の影響をうけやすい伝承である。どちらからの影響であるかということは明示できぬが、「拾い物分配」「長い名の子ども」は昔話と早物語に、同型の伝承を指摘できる。

Ⅲ 分類から早物語を考えると 表①をみてもわかるように、昔話伝承と同様、伝承者の数としては女の人が圧倒的である。

要素としては①祝福②大話③色ものであり②③には笑いの要素も含まれている。

1 てんぼの解釈(アンケート④)

(遊佐町)

「てんぼでかるわざみたいだ」(向う見ず・無鉄砲) 多次見及賢

「あの人てんぼこぎだ」(身がきく人だ・軽業的だ) 齊藤瑞寿

「なんぼあの児てんぼこいて危ねえ」(高い所に登る) 奥山大観

(八幡町)

「てんぼな子だな」(高い木等に登り危ないことをする) 富山承伝

(恐いものしらず) 佐々木良成

「あれあれ、あの人てんぼこぎだごどや」(高い所も平気な者) 丸藤只孝

藤只孝

(平田町)

「あれはてんぼな男だ」(木の上等高い所に登る) 菊池及亮

「てんぼな男だの。おおてんぼこぎ野郎だの」(普通の人ができないことを言ったりしたりすること) 村田清興

津

「あの人てんぼこぎだ」(高い木の上などでも恐がらない人) 菅原志

津

「あの子はてんぼでの」(並はずれで元気のよい) 木村常光

(松山町)

「あの人てんぼだよ」(手の指等に故障のある人) 菊池信雄

「あれはてんぼな男だ」(高い所に平気で登る) 原全忠

以上のようにてんぼに対して「ありえないこと、嘘」ということではなく、「てんぼな子」「てんぼこぎ」などと使い「向う見ず、無鉄砲」との指摘や、「高い所も平気で登る者」ということでの「てんぼこぎ」である。「てんぼ語り」と早物語を称する場合もあることとのかねあいで、今後も考えていきたい。

2 アンケート⑦4について

行商のさい、客よせのため物語り等を聞いたかというアンケートに対し、八幡町市条の丸藤只孝（普門院住職）は「聞いたような記憶はあるが覚えていない」と答えた。

このことは、赤塚幸が孫婆さんの行商についてゆき、その際物語りを語ったとする報告と、八幡町という地域・行商の中身でも一致する。この二例では確実なことはいえぬが、少なくとも行商人と早物語りは結びついてきた時代があったのである。早物語は、このような形態も持ち伝承保持してきたといえる。

ちなみに、アンケートからみられた行商について列挙してみると、次のごとくである。

（遊佐町）

富山県からの薬売り・近隣から魚売り（町内・島崎・酒田市宮の浦から天草・焼き干・干し鱈・塩干物・りんご等をもって、昭和三十年頃まで来た）

（八幡町）

浜から磯物など魚の干物・魚の小魚・海草をもって売りに来た。

（平田町）

鶴岡市から籠売り・衣類、魚、熊の胃売り・越中富山の薬売り・雑貨日用品等の行商。

（松山町）

奈良からの薬売り・食品、家庭用品の行商。

V 早物語伝承の展開

早物語伝承を展開の面から考えると、『平家物語』と早物語の関係という問題がでてくる。

安間清は『早物語覚え書』『早物語研究』の中で、次のように指摘

している。「つまり、源平合戦よりはるかにはいりこるから、琵琶法師は琵琶を弾じて『物語』を語ることをしていたのであった。そして、この『物語』が普通にいわゆる文学性、悲劇性というようなものからはきわめてほど遠いものであったらうことは、いま述べたところからも明らかである。したがって、琵琶法師が平家を語ることを唯一の表て芸とするようになってのち、従来かれらに語られるものであった『物語』自体は、そのもとからの位地をいちじるしく軽減するにいたったものであらうと考えられる。このことは『物語』本来の立場からいえば、『庇を貸して母屋をとられた』ことであつたかも知れない。してみると、その影のきわめてうすくなることを免れ得なかつた後世の早物語こそが、しかし、実は古い琵琶法師の芸能の本流をつぐものであつたかも知れないのであつた」と四点にわたつての指摘である。つまり、平家を語ることがあつて早物語の出現ということではなく平家を語る以前から早物語の存在はあつたとする想定である。そして、平家を語ることが、琵琶法師の主たる語り物つまり表て芸となつた時・早物語は前座の口演、口ならしのようなものになつたのである。しかし、である。ここで現在の伝承にもどつてみると、少なくとも早物語は「モノガタリ」として、過去、文献上に「物語・早物語」と記述させたものと同様な詞章が存在する。つまり、早物語伝承は、伝承として生き残れる生命をもっているといふことができる。即興性・創作性にとんだ伝承であることと同時に、社会・時代の変化にも対応できる状態である。即興性・創作性とは聴き手の意識に対応できる伝承であることの証であり、要素として普遍性をもつ「祝う・笑う」ことを中軸として、ありえないことを語る大話の要素も併せもつ。このようにみてくると、早物語伝承は、伝承が固定化しきまりきつた形とならず、発展・展開する伝承であるといえる。

32

⑥ 1、山伏さんが来たことがありますか。

(あります、ありません)

2、山伏さんのことをなんと呼びますか。

3、山伏さんはどんなことをしますか。

4、山伏さんが「モノガタリ」など話や語りをしますか。

5、山伏さんはどこから来、どこへ行くことになっていますか。

6、山伏さんの常宿はありますか。

7、山伏さんのでてくる話がありますか。

8、山伏さんは現在でも来ますか。現在来ないとすると、いつ頃まで来たでしょうか。

(来る、来ない↓)

⑦ 1、行商の人が来ますか。現在来ないとすると、いつ頃まで来たでしょうか。

(来る、来ない↓)

2、行商の人はどこから来ましたか。

3、行商の人は、どのようなものを売りにきましたか。

4、行商の人が、客よせのため「モノガタリ」等をしましたか。

⑧ 次の昔話をご存知ですか。ご存知でしたら具体的におしえてください。

1 拾い物分配

△、鷺と鳩が金を拾って分配で争う。△、蟻が鷺三文、鳩四文、鳩八文、蟻はありだけといって残りをとる。

2 蜂と蟻の魚分配

△、蟻が鯨を拾う。二四が八といって蜂がとる。△、蜂が鯛を拾う。ありがたいといって蟻がとる。

3 大鳥と蝦

△ 大鳥(鶴・鷹)が自分が世界で一番大きいと考えて旅に出る。一日がかりで蝦の角の間を飛ぶ。△ 蝦が一番大きいと考えて、洞穴から洞穴まで泳いで渡ると、鱒(鱒・鯛・鯉・鮒)の鼻の穴。△ 鱒のくしゃみで吹き飛ばされて、蝦は岩に打ちつけられて腰が曲がる。△ 鱒が蛤の中に泊まる。△ 蛤が海辺に打ち上げられて医者(子供)に拾われる。だから人間が一番大きい。

4 長い名の子

短い名をつけると早死にするので長い名(じゅげむじゅげむ……)をつける。子供が井戸に落ちる。名を呼んでいる間に死ぬ。

⑨ 次のような早物語をご存知ですか。ご存知でしたら具体的におしえてください。

1 それ物語り語り候

祝い重なるこの家の座敷、恵比寿様の仲人で、大黒様の婿貰った、貰うた大黒さんは福の神、七福神の酒盛りで、鶴と亀の舞い遊び恵比寿さんと大黒さんが釣り辛かっいで、出て踊るんの物語り。

2 それ物語り候

ここの屋形はなかなか福々しい、前には土蔵もござ候、その隣りには蔵もあれば、かんじょうもあり、また小便所もあれば、その末には蛇になっただか、じゃのうちの一つ、長者となったんの物語り。

3 そうれ物語り語り候

天保元年やかんの年正月の初夢に、西の海に火がついて、盲見つけて、鰻が聞きつけ、唾が叫んで、手無しが招き、足無しが走り、夕べ生れた金平、一升豆腐を足駄に履いて、三尺手拭杖にして、六尺棒を空鉢巻、塗りたてのなま畔を、ヌタリヌタリと渡ったれば、かぶらみみずの仲人に、螺筋より首筋まで、こっつあがつあまに、ぼつとりとつとり、曰で掘っても抜けません、杵で掘っても抜けません、その時の葉、畑の中のへえ雑魚、海の中のふぐだち、木の裏のこんぼ、三色四色を黒焼きにして、明日後日つけたれば、昨日一昨日直ったんの物語り。

4 そーれ物語り候

うちの畑に鳩は豆くて、鶏米くて、仲良く遊んだおーりに、そこで鶏金百拾て、鳩が拾ったと、鶏が拾ったとけんかっこが始まったと、そこさアリがちよこらちよこらと出はってきて、あとの九十をさいぎつくし、鳩は八文、鶏二文、あと九十はみなアリッコもつけたの物語り候。